

我があき子抄

藤原義江

我があき子抄

藤原 義江

毎日新聞社

我があき子抄〈軽装本〉

著者略歴 藤原義江(ふじわら よしえ)
1898年下関生まれ、早稲田実業卒。新国
劇、原信子歌劇団をへて1919年声楽勉強
のためイタリア留学。1923年帰国以来、世
界音楽旅行20数回。1934年藤原歌劇団を
創立してわが国グランドオペラの育成に
献身。仏伊両国政府から叙勲、芸術院賞、
毎日賞、伊庭孝賞受賞。現在、藤原歌劇研
究所主宰。住所 東京都港区赤坂6-19-27

¥ 300

昭和43年9月20日印刷

昭和43年9月30日発行

著 者 © 藤 原 義 江

発行人 星 野 慶 栄

編集人 奥 田 健 策

印 刷 図 書 印 刷

発行所 毎 日 新 聞 社

郵便番号100・東京都千代田区竹平町
郵便番号530・大阪市北区堂島
郵便番号802・北九州市小倉区紺屋町
郵便番号450・名古屋市中村区堀内町

製本 大口製本

目

次

口 絵

めぐりあい（大正十二年）

サロメとアンナ・カレーニナ

神経衰弱

宮下氏との離婚

からたちの花

日本脱出（昭和三年）

決意

劇的な出帆

南欧の空の下（昭和三年）

僕のイタリア日記

あき子歌日記

カジノ通い

三 三 三 九

三 三

三 三 六 九

嵐のなかで（昭和四年）

妨害と弾圧

三

結婚披露宴

六

あき子の日記

七

早苗のこと

三

〈青鉛筆〉

七

高田元三郎さん

九

ふたたびミラノへ（昭和五年）

オペラの本格勉強

八

シシリ―島便り

八

義昭誕生（昭和六年）

あき子の育児日記

九

柏ちゃんのこと

二六

母子再会

三

あざやかな決断

三〇

藤原歌劇団の創立（昭和九年）

歌いたいオペラを歌おう

一三三

あき子の訳詞

一三六

我が家のホウレン草

一四〇

鎌倉山

一四二

ハーフ・カップ

一四三

あき子書簡（昭和十一年）

未発表の手紙

一四七

虫——聖母マリア

一五三

ニューヨークの思い出

一九二

吉田茂元首相への感謝と追憶

二〇四

親子三人の世界一周

二〇五

戦争とオペラ（昭和十六年）

肋骨を折る

二二七

あき子と刑事

二九

あき子と短刀

三三

平和は戻ったが……（昭和二十年）

砂原美智子の登場

三四

豚と真珠

三六

カタストロフ（昭和二十八年）

上衣のポケット

三三

ロサンゼルス of 別れ

三四

身一つの最後

三五

記者会見

三七

痛恨（昭和三十二年）

資生堂の封筒

三九

僕のめめしさ

四〇

あき子至上

二四二

参議院議員

二四四

挽

歌（昭和四十二年）

お通夜・斎場・墓

二四五

*

あき子のノートから

松平里子夫人の死

二五一

回想

二五五

オペラ未定稿（無題）

二七七

*

痴人のことば（あとがきに代えて）

二八三

あき子略年譜

二八七

我があき子抄

装
本
原
田
維
夫

めぐりあい（大正十二年）

サロメとアンナ・カレーニナ

あき子と僕との最初の出会いは、関東大震災のあった大正十二年（一九二三）の初夏、帝国ホテルのグリルでもよおされた、パソンピエール・ベルギー大使のダンスパーティーであった。

あき子を僕に紹介してくれたのは、あき子と学習院の同級生である松平康昌侯爵夫人あや子さんである。若い時からダンスのきらいな僕は、踊らなかったが、紹介された宮下左右輔夫人あき子が、次から次へとかわる音楽につれて、見事に踊るのを、ただじっとみつめていた。上背があり、美貌のあき子は、特に目立って人々の注意を惹いていた。

その日から二日たった朝、帝国ホテルにいた僕は、あき子からの英文の手紙を受けとった。この手紙には、署名はなかったが、それがあき子からであることは、直感的にすぐわかった。

神田のYMCAホールで（当時のYMCAホールは、東京で一ばん近代的な設備をはこる文化ホールだった）、

アラ・ナジモヴァの映画「サロメ」が封切られている、それへの招待で、彼女は二階正面第二列の中央に席をとつてあるから、是非とも来て、つかまえてほしい、では、お目にかかつて万々……といった短い手紙であつた。

手紙を英文にしたのは、あき子なりの、細心の注意を払つたためであつたろう。文面は簡単だが、強い、張りのある文章の英文だった。

しかし、この招待に対して、僕は、あき子以上に気をくばつたわけでもないのに、なぜだか、その日、YMCAホールへは行かなかった。このためらいは、僕としては珍しいものだった。しかし、行きはしなかつたけれど、時間がたつにしたがつて、だんだん氣になつてきた。あき子は、いまごろ、僕を待つのに氣をとられ、サロメどころではあるまい。そうだ、まだ始まつたばかりのところだ、これから行つても間に合う、出かけようか、どうしようか、と、僕は何も手につかず、ただぼんやり時間を無駄に消しては、また考えた。今日行かなければ、もう彼女には二度と会えないかもしれない——。やはり勇氣を出すべきだ。行くんだ——と。

ホテルの部屋の中を、動物園のオリの中の熊のように、行きつ戻りつしては、帽子をとったり、置いたりして、またも時間を消した。居ても立つてもやりきれない氣持から、ついに僕はYMCAホールへ電話した。返事は、映画はいま終わりました、とのこと。これをきいて、僕はほつとした。

しかし、それもつかの間で、それからというもの、彼女からかならず電話がかかってくるにちがいない、と、こんどはそれを待っていらしだした。もしホテルまで歩いてくるにしても、元氣のよ

い足どりではなからう、そうすれば、神田から日比谷までは、少なくとも女の足で三十分はかかるだろう。よし、何か一杯飲んで落ちつくんだ。こうきめてバアへ行き、ポルトを一杯ひっかけた。とにかく落ちつくのだ、落ちつきのない気持で彼女に会って、ドジをふんではいけない、と自分で自分にいいきかせ、バアから部屋へ戻って、二十分、三十分、一時間、二時間……。夕食も食堂へ行かずに部屋へとり寄せた。

しかし、その日は、ついに彼女からの電話はなかった。きつと速達だろう、こうきめて、僕はおそくなって床へ入った。

廊下をへだてた遠くで、電話のベルが鳴るごとに、やはり胸が騒いだ。しかし、いつの間にか眠ってしまった。

翌朝だった。早くボーイがやってきた。お電話です！僕ははね起きた。そのころの帝国ホテルは、やっと、いまの旧館が半分だけ出来たばかりで、僕は、まだ未完成の南側の分館にいたので、自分の部屋に電話がなかったのである。電話は、いちいちボーイの詰め所まで行かなければならなかった。詰め所へ行くと、ボーイが、受話器を持って僕を待っていた。

「男性かい？ 女性かい？」

こう聞くのは僕の癖で、電話のたびに僕はまず、こうたずねるのだ。

「徳川さんからございます」

ボーイの返事をきいて、僕はがっかりしたし、少しおかしいな、とも思ったが、とにかく受話器を

にぎった。

「私です。徳川ではありません、おわかり？」

僕の全身の血潮が、たぎり騒いだ。そして、電話をへだてて想像される、あき子の髪の毛の具合、化粧、着物の模様までが、目の前にちらついた。

僕は、あらゆる方法で、つとめて平静に話をしようとしたが、言っていることは、まるでちぐはぐなのが、自分によくわかった。こんな時、僕を助けてくれる方法なんて何もなかった。

「では、三時にね！」

この最後の言葉だけが、僕がつかまえることのできた、はっきりした彼女の声だった。あとは、何をどう話したのか、聞かれたのか、まったくうわの空だった。

あき子は約束どおり、三時にホテルへ来た。二人は、日を決めて箱根に行く約束をした。こうして箱根湯本へ行き福住旅館に泊った。

僕が風呂から上がってくると、次の間にはもう蚊帳が吊ってあった。僕はさっそく蚊帳の中へ入り、寝ころんで、ぼんやり彼女を待った。やがて、あき子が風呂から帰って来た。鏡台の前に、浴衣一枚の立てひざで、ぬれ髪をなおし、あごの下からうなじへかけて、うす化粧をほどこしているあき子の横顔を、僕は一秒の時間も惜しいくらいにじっとみつめていた。そこから目をはなすことはできなかった。

鏡台の前に坐つて、立てひざという、こんな様は、かつて長田幹彦や泉鏡花の小説で読んだことはあるが、——いま目の前に見る、あき子の湯上がり姿のとりけるような、なまめかしさ、すぎとおるような美しさは、いままで読んだ数々の小説のどの描写にも、これに及ぶものはないと思った。ひととおり、鏡台の前での身じまいが終わると、あき子は次の間の襖を閉めに立った。あき子はそこで、しばらくのあいだ、ためらっていた。僕は、いったん蚊帳から出て、あき子の手をとつて、中へさそい入れた。

あき子は、しばらくのあいだ、僕の枕もとに坐つて僕をみつめ、

「私、ひとの奥さんよ」

と言つて、涙ぐんだまま、口をきかなかった。

そして、無言の時が、かなり流れた。

すごい勢いで、堰は切られた。

やや落ちつきをとり戻した時、

「私、生きていてよかった!」

と、あき子は、しみじみと言った。

こうして、ついに越えるべからざる柵を二人で押し倒し、行くところまで行つてしまった。

だが、僕は少しも後悔しなかった。それどころか、あき子を救った、一人の女性を救った、ときえ

思った。あとになって、人は僕を救い難い男とわらい、モラルの限界音痴ともきめつけた。しかし、僕はそんなことには、なんの痛手もこうむらない。そして、そんな声を聞き、そうした活字を見た時、いつも僕を救ってくれたのは、あき子の「生きていて、よかった！」の一言だった。

* 福住旅館での、あき子との、この記念すべき、二人の生涯を決定づけた日が、大正十二年の何月何日だったかは、いままではっきりしなかったが、あき子がなくなり、あき子の遺した本書所収の日記、手紙、短歌、書きかけの原稿などのはいった書類入れが出てきて、その手紙の中でこの日が七月四日であったことが、はっきりした。(本書一六〇ページ)

箱根湯本(大正十二年七月)

手をとられ五足ばかりゆくうちにいつしか越えし道の掟か

六尺の屏風よりもかるやかにわれ越えにけり道の掟を

遠つ世の女王サロメ見よやここにわれあたたかきくちびる得たり

* あき子はサロメが好きで、もしも自分が女優だったら、ぜひサロメをやってみたいと言っていたし、本棚にはサロメの原書と日本訳が教冊ならべてあった。

わするまじ忘れたもうなこの一夜いまのいまわが君とありしこと
めくるめくおどろきに似し悦びよわれ君見たり君われ見たり
われにこの力ありとは知りぬいもうれしというにやや恐ろしき
よろこびも恥も愁いも君が手にまかせまつる子を憎しとおぼすや